



特243
337

11.4.21

人物金時

無駄の無使方

紙本

松波治郎著

定價十錢

始



特243
337

目次

六十年の不作も……	三
生理的條件……	五
天賦の喋舌……	八
不得要領の要領……	一三
敏腕は何處にあるか……	一六
筆法の真髓……	一九
織田信長のやり方……	二二
豆腐と土地……	二二



物と金との関連………	三
かう云ふ實例………	二六
經驗を生かせ………	二六
二種のやくざ………	三〇
幸福を驅逐する………	三三
板垣伯の云ひ草………	三九
ルソーの警告………	四一
大西郷の「機會の説」………	四四
無駄のない生き方………	四六

人 物 金 時

無駄のない使ひ方

松 波 治 郎

六十年の不作も

お喋舌りの女房があつたとする。朝から晩迄、誰れでも構はず喋舌り散らして、台所は煤と塵だらけ、御享主の食事には、きんちよそこの煮豆屋や、つくだにやのものです。年中間に合せ、無責任極る與太を飛ばして、その上非常に人間が薄つべらで、こちらから持つて行く話は聞かうともしない。一人で、べら／＼年中唇を活動させて居なけりや納まらぬ、としたら、こ

んな女房を買つた亭主は、それこそ御難、六十年位の不作ぢや追つ付かない。

つまり、まるで女房としての役には立たないのだ、内助の功處ではない内壞の功が著しいと云ふ始末にならぬもの、亭主の氣持ちの統一すら、此の喋舌女房の爲めに、すつかり亂されてしまつて、何にも出来ない、邪魔な存在である。

かうなると亭主たるもの、志を立て、三原山へ飛び込むか、昔なら頭を丸めて出奔出家するかしなければ納まりがつかないと思ふのが普通だ。

が、一寸待つた！ それは早計である。

一體、人生に無駄なものはない。此のお喋舌り女房だとして使ひやうによつては天下の寶となるべきものを具備して居る。

かう云ふ、お喋舌り女房を家庭に入れて、所謂良妻賢母としやうとする事が既に間違つて居るのだ。彼女は喋舌ることに於て人生の生甲斐を感じ與太を飛ばすことが出来るに依つて此の地上に極樂を見出し、無責任薄情であることに依つて自己の優越感を満足させて居るのである。怪しからぬ話だ——と怒つたつて始まらない、さう出来てしまつて居るのだ。

彼女を生かすのは家庭ではない、若し彼安をして最も愉快に特色を發揮させ、つまりは、無駄のない使ひ方をして、その御亭主は、忠實なる女中を雇つて、悠々とかの研究にでも没頭したとする。けだし、その時こそ、此の御亭主も六十年以上超數字の不作を嘆かずとも済むのである。いや／＼此の女房あつてこそと隨喜の涙を流さずには居られないことになる。

生理的條件

と云ふのは、どうすればよいか、それは、その女房を外へ出すことである。

眼を大きく展げば、世の中には、かう云ふお喋舌り女房でなければ出来ない仕事がある。

人の云ふことなど耳にせず、喋舌りまくる其の特質、それは度胸のいゝものである。もし多少顔がよければ直ちにマネキンにすべしである。

マネキンガールも昔は沈黙の佳人が多かつた。今は多くなつたものだから自然の勢として、

お喋舌りをして宣傳し、御手間に賣りつけねばならない。その賣りつけるには、たとへば「人絹」を「錦紗以上」の値打があるやうに、無責任極る斷定を下さねばならない場合もある。

かう云ふことは、所謂良妻賢母には良心に恥ぢて出来ることではない。處が、喋舌天才家は、それが特技として出来るのである。誠に、打つてつけであつて、彼女の方から云はしむれば、好きなお喋舌りが相手構はず一日中出来て、無責任の與太が、天下晴れて放送出来て、愉快極りないものである。

其處で得た報酬を以て、自宅へ歸つて大威張り、女中を叱り飛ばし、御亭主に、お蔭ぶりを大いに示したつて、何處からも異議は生じない。女中はいゝお手當は頂くし、亭主野郎は小使に困らない。どうせ朝早くから夜遅く迄勤務して来るのだから、その雑音の入る間も極く僅かの時間である。これは諦めるに手数が掛らない。

然らば、大切な女房を、そんなにして、貞操の危機は？ など、心配する、やきもち屋もある。

だが、其處は決して心配するにはあたらなない。大體が薄つべらな人間で、無責任な與太が大

好きで、喋舌が天職だとある。それは中には袖をひくものもあらう、なびく場合もあるだらう。しかしだ、大體が薄つべらで、無責任で、喋舌が天職であつてみれば、それに對して眞劍の戀愛など成立する筈がない。すぐ、その薄つべらと無責任と喋舌が飽きさせてしまふ。時には、一寸遊ばれてしまつて馬鹿を見ること位はある。しかし、やつぱり彼女は亭主の處へ歸つてくる。遊ばれる位のことには、正に、かう云ふ天才女房を持つた有難いお蔭と、あきらめるべしである。

沈黙、重厚、親切な女性が、マネキンなどで成功する筈はない。してみると、お喋舌り女房はマネキン稼ぎをさせるには誠に適切な存在である。良妻賢母式の女性などは、マネキンには落第である。

次に、まだ、無駄のない使ひ方がある。顔が悪ければ、保険の外交員或は押賣りである。世に保険の外交員ほど難かしいものはないと云ふ。五尺六尺の有髯男子すら「保険屋」と聞いただけで玄關拂ひの食ひつゞけでは、いやになつてしまつて居る。くさつてゐる。

が、今も云ふ通り、人の云ふことなど耳にも入れぬ長屋の井戸端會議の會長たる資格あるも

のなら、その押の強さは天下無敵である。とにかく、玄關先へ一歩足を踏み入れたら、自分の云ふだけのことは云はないでは、第一彼女の生理的條件が許さない。喋舌りまくることは、彼女には極めて自然で、全く不可抗力なのである。だからして、保険の成績などが極めて良好に舉るのには云ふを俟たない。

かう云ふ點を利用して〇〇〇生命などは一時大成功をした。結果は、いろんな問題をひき起してぶつ潰れてしまつたが、その當時の女群の戸別訪問たるや物凄いなものがあつた。子供へ繪本を持つてくる。キヤラメルを持つて来る。女房へ安半襟を持つて来る。そして、喋舌りまくる。結果は、その女勤誘員の喋舌にたゞられて、夜、うなされる程になる。かうなりや契約しない方が無理だ、さうしなければ、夜もおち／＼安眠出来ないと云ふことになる。

天賦の喋舌

更に押賣りである。押賣りと云ふものは、玄關をあけて、

「御免下さい」

と云つて、出て来た人間が誰れであらうと、それから全く一瀉千里、無茶苦茶に、立て續けにこつちの云ふことだけ喋舌り散らして、玄關先きに、すらり、と品物を整列させてしまはぬといけないのである。

「間に合つて居ました」

「スリません」

かうした僅かの言葉をすら挟む餘裕のない様に、ペラ／＼油紙に火のついたやうにやらねばならない。

こればかりは修練の功に依つて、其處へ到達すると云ふことは至難である。こればかりは、一にも天才、二にも天才でなければならぬ。

喋舌りまくること、それによつてのみ愉快を感じる人間でなくては、やらうたつて出来ない相談である。

其處で、家事などは、投げすてゝ顧みず、たゞ／＼喋舌るチャンスのみ掴みたいのみで生

涯を送る長屋の井戸端會議の重要メンバーたるものこそ、此の押賣りには打つてつけの好資格者である。

ことわられたつて、第一喋舌に愉快を感じて居るのだから、ちつとも不快にならない。直ちにくさらずに、次の家の玄關へと手が伸ばされるのである。

およそ、人の無駄のない使ひ方は、その人を最も愉快に働かせることである。かうした天才的女房を、あつたら台所の隅へ押しやつたり、毎夜、女性の貞淑、重厚などを説いたとて何にもなりはせぬ。

かと云つて、マネキンの賣る品物、保険屋さん、押賣りのもの、皆インチキであるなど、私は夢云ふのではないのだ。一例として、さう云ふ天才の必要な時に、全く天賦的に恵まれたのが、かう云ふ喋舌厚顔史子である。

だからして、女房の六十年の不作など、適材適所を考へずに、悲觀するなどは、全く無駄の限りである。よろしく、かう云ふ女性を配偶とした人は、良妻賢母式な家庭の内助は優秀な女中に俟つべしで、天才女房はその天才を、何處迄も伴ばしてやらなくてはならない。

これが先づ例として人の無駄のない使ひ方である。

不得要領の要領

よく入社試験などに、言語明晰と云ふのがある。これも、どうかと思ふのは、言語不明晰でなければならぬ必要も場合によつてはある。

かう云ふ例がある。今は第一流の出版會社である××社に×××と云ふ人物があつた。これは其の社の國寶とも云ふべき重要な人材であつた。

が、世に此の日程、不得要領な人もないとの評判であつた。處が、此の不得要領を生かして使つたからこそ××社は日本一流の出版社として成功したのであつた。

と云ふのは××社は經濟がとて至難であつた。至難である經濟を切り抜ける爲めには、いつも債鬼への接衝係が必要である。さて、此の債鬼の接衝係と云ふものは、要領のいゝ、言語明晰な人では、どうも成績が上らない。

「社長は、それで何時お歸りです」

「は、五時三十分です」

など、やるやうでは駄目である。

「社長は、それで何時歸られるのですか」

「さあ、何しろ、忙がしいので、あちらへ廻ると云ふ話もあつたし、こちらにも用があると申しましたし、今日は歸らぬとも云つたやうですし、明日は休むと云つたのかも知れませんが、さあ、どうですか、そこんところは、えへつ、はあ、つまり、はあ」

かう云ふ返事だと、債鬼の方で、どうしたらいいか迷つてしまふ。さりとして、債鬼の方で、もう、腹をきめて、

「ぢや、今日は歸りますから、社長がお歸りでしたら、かう傳へて頂きたい」と要求された時、その時だけは潮時を見て、

「はあ、承知しました、そりあ間違ひなく——」

と、はつきり返事が出来るのでなくてはならない。

その間の呼吸は××社の××氏は實に堂に入つたものであつた。

この×××氏あつたればこそ、××社の社長は、非常な難關も一向、ぼろを出さずに突破してしまつた。

かう云ふ處にも人の無駄のない使ひ方がある。

敏腕は何處にあるか

新聞社などは政治部もあり、社會部もあり、家庭欄もあり、編輯もあり外勤記者もある。かう云ふ場合、随分人の無駄な使ひ方をして失敗して居るのも多いのである。

外勤記者として成功する素質と、編輯記者として成功する素質とは全然違つて居る。

非常に要領がよくて、誰れにでも其の胸襟を開かせる、機嫌とりのうまい記者があつた。文章もなか／＼うまい。

これが甲社から乙社へ轉勤した。處が、乙社では、その記社が敏腕な記者だとの評判を買つ

たので、早速、社會部の特種係りとして、探訪の遊軍をやらせたのである。時に、日本郵船では、海上船員がストライキをやつたとの情報が入つて來た。で、その記者は直ちに、日本郵船へと向けられたのであつた。

記者は直ちに、日本郵船で、それ／＼の課長係長に會つた。そして、事實の有無を調べた。先方では、

「絶対に、そんなことはありませんね」

と否定し去つた。で、いろ／＼雑話をして、非常な仲好しとなつて歸つて來た。

處が社に歸り、報告すると同時に、その記者は編輯長から怒鳴り据ゑられた。そして、直ちに代りの記者が郵船へ行つた。

代りの記者は郵船の食堂へもぐり込んで、其處で、すつかりストライキの時を聞いてしまつて、歸社した。

前の記社は、その爲めに危く齷齪される處だつた。

が、流石に、その編輯長は人の使ひ方の呼吸を呑み込んで居た。先きの記者を、今度は家庭

欄へ廻したのである。

ところが、何といふ素晴らしいであらう、斷然、その家庭欄は精彩を放つて來るやら、信用されるやら、結局その新聞は家庭欄を中心にして、どし／＼賣行きが増して行つた。

其處である。同じ敏腕と稱しても敏腕たるの場所がある。表面から堂々と名乗りをかけて、表面的に信用を博して行くやり方の腕と、裏面から、七首的に、暴露的に行く敏腕と、それ／＼特徴がある。甲をして乙に代らしめて、同じく敏腕を發揮させると云ふことは、それは不可能の沙汰であると思ふなければならぬ。

その人間の特質、その好む方向、それを、よく知り抜いた上で、使ひやうに無駄さへなければ、敏腕なものは隨所にある。敏腕と稱するものは、たゞ、使ふ方で無駄のない使ひ方をして居たと云ふことを第一に考ふべきであつて、他社の敏腕を抜いてくることのみが、あながち得策とは思へないのだ、先づ、自己の人の使ひ方に、無駄ありや否やを、よく考へてみる必要がある。

筆法の眞髓

一六。

特質を見抜くと云ふことが大切なのは以上の如きである。だからして、人の使ひ方には、何よりも先づ「口を閉ぢて目を開け」の格言を守る必要がある。

口を閉ぢることは即ち觀察をよくすることであることは云ふ迄もない。と同時に人を使ふに口を閉ぢることは、兎角、輕卒に批評することが避け得られるのである。更に、人を無駄に使はないことは、その命令の簡單明瞭なことを要する。そして、叱言は、ごくまれに——、まれでない叱言は、ラヂオの雑音と同じで、煩はしい感じを與へるだけで何等叱言としての効果がないのである。

その上に、渡邊華山は其の商人訓の中に、かう云つて居る。

「先づ朝は召使よりも早く起きよ」

と。全く、使ふものは、平凡に云ひ古された言葉であるが使はれるのである。ついでに、渡

邊華山の商人訓を列擧すると、

- 一、十兩の客よりも百文の客を大切にせよ。
- 一、買人が要らずして返しに來たならば、賣る時よりも丁寧^{ていねい}にせよ。
- 一、繁昌^{はんじやう}するに従つて儉約^{けんやく}せよ。
- 一、小遣^{こぢき}は一文より記せ。
- 一、開店^{かいてん}の時を忘るゝな。
- 一、同商賣が近所に出來たならば、懇意^{こんい}を厚^{あつ}うし互に勵^{はげ}めよ。
- 一、出店^{でせう}を開きたらば三ケ年は食料^{しょくりやう}を送れ。

である。

この中、特に考へねばならぬのは、「繁昌するに従つて儉約せよ」の一句である。これは、つい繁昌すると油斷して、金使ひが荒くなるから、それに氣をつけるとの意味もあるが、たゞ、それだけに思つてはならない。

私の知人に、かう云ふ人間があつた。苦しい時に、彼は三人も四人も女中を使つた。

一七

「君、苦しいのに、そんなに女中など使はないで節約したら、どうだね」と忠告すると、彼は、

「残念乍ら、その忠告には應じかねる、何故なら、僕はすでに取引先の連中から、もう参つたらう、との疑の眼を以て見られて居るのだ、こゝで、益々みすばらしい形を示したら最後、僕の信用と云ふものは零になる。苦しいが、これか腹鬱さ」と云つた。

そして、彼が、ぐつと形勢を盛り返すと、どしどし雇人を尠くして、最後には子守一人、台所は細君自身が朝から晩迄働いて居ると云ふ有様。

「ちと、變ぢやないか」

私が問ふと、彼は、にっこりとして云つた。

「君、もう大丈夫なんだ、實力があれば、ちつとも驚かないからね、つまり現在は如何にして實力を損じないか、をだけ考へて居ればいゝんだよ」と朗かだつた。

成程と、私ば感心した。果せる哉彼は巨萬の富を穫得したのであつた。

織田信長のやり方

織田信長に、かう云ふ話がある。鎧師に一貫子播磨と云つて海内無双を稱せられて居たが、これに信長は、楯無しの鎧を注文した。

「漸く出来上りました」

と、一貫子播磨が、それを持つて信長の前へ出ると、

「確と種子島弾ね返えさうな？」

と、何時も乍らの皮肉な口調で信長は云つた。

「はい、仰せまでも御座いませぬ」

きつぱりと云ふ一貫子に、信長は、

「では一貫子、予が直々規ひをつけやう、和主、その鎧を着て的に立てつ」

と命じた。

並居る家來たちは驚いて、何か信長の氣分に觸つたことでもあつたかと、びく／＼した。けれども、當人の一貫子は、ちつとも騒がず、

「御意、上直々のお試し有難く謝し奉ります」

と答へて、従容として自製の鎧を身につけて、庭の眞唯中に突つ立つた。

信長は、愛用の種子島を取上げた。そして十二分に規を定めて、あはや指を引金にあてやうとした。

が、その時、一貫子播磨は、依然として、眉一筋も動かさず、突つ立つたまゝだつた。

それを信長は、凝つと覗めて居たが、忽ち、種子島を下ろして、

「うゝむ、播磨出かしたぞ、出來榮え天晴れ、もはや試すには及ばぬ、價は思ふまゝに取らすぞ、いくらでも望め！」

と、とても満足さうに云つた。

これが、この信長が、此處で引金をひくやうな男だつたら、あれだけの仕事は出來ない。

入を使ふにも、飽迄疑い、更に疑つて、用心に要領を重ねて使ふ人がある。

が、これは最後には使はれる人間に飽きられてしまふ。

さりとして、見境のないことは大失敗の原因となる。

ほんの紙一重の差である。

其處へ行つたら全幅の信頼を置いて、見定めたなら、徹底的に信頼して、任かせること、これが即ち、人の無理のない使ひ方である。

豆腐と土地

物の無駄のない使ひ方に就いて面白い話がある。

ある豆腐好きの男の處へ、友達が訪問して來た。そして、豆腐をうまさうに食べて居る男へ、

「あーあー、今日も又、惜しいことをしたのう」

と嘆聲を洩らした。

「何を、そんなに嘆くのだ？」

「又しても豆腐を一丁べろりと平げて居るからだ」

「豆腐、こりや好物だからさ」

「うん、豆腐を食つて悪いとは云はぬ、けれどなあ、かね／＼聞けば、お前の父親は、土地を取戻したい／＼と云つて死んださうだ、それを思ひ出すのだ」

「その父の言葉と豆腐と何の関係がある」

「大有りさ」

と、その友達の云ふ事に、

「考へてみよ、その豆腐一丁五錢で買ふとする、いや現に五錢で買つて居るだらう、してみりや、もし、その五錢で土地を買ふとしてみたまへ、豆腐だけの四角い土地か、しかも青天井から、地の底迄のものが、ちやんと買へるではないか、豆腐を食つて居るのを見ると、僕は君の父の遺言を思ひ出して、それだけの四角の土地を食つて居るとしか思へない」と云つた。それを聞いた男は、大いに發奮して、

「成程、ものは考へやうだ」

と、それから一奮發、とうとう父の遺言を實行したと云ふことである。

物に對する觀念が、かう云ふ風に連想を以て來る時は、決して物の使ひ方に無駄はないものである。

物と金との關連

「不要の品を買入るゝ人は、遠からずして必要の品を賣拂ふに至るべし」

と云ふ西洋の金言がある。

よく、安いからと云つて、必要以上に大根や菜を買ひ込んで、遂に新鮮さを失はせ、その上、多くを腐敗させてしまふ主婦がある。

安いから——と云ふのは、大きな誘惑である。その誘惑に負けて、不必要なものを買ひ込むことは、一番物を無駄にすることである。

が、物は、どうしても金と關連して考へてゆかねばならない。いゝ例が、昭和四年の七月九日の濱口内閣が金融出解禁をやらうと云ふ聲明を出した。その時、

「これは大變だ、物の値打が減茶く〜に下るんだぞ」と氣がついた人は随分多かつたらうと思ふ。

かう云ふ場合は、物を賣つて金に換へて置くのが實に悞口であるのだ。

處が、昭和六年十二月十三日には金輸出再禁止をしたのである。

その日から俄然、今日に到る迄形勢は反對になつて居る。

つまり「金を物に換へる時代」が來たのである。

この「物」と「金」との関係に、よく見透しをつけてやつた人が、大富豪にもなり、失敗したのが大會社の倒産である。

今度の東京の市會議員に淺草から無理押に當選させられた松崎孫太郎と云ふ老人がある。

此の人は勿論大富豪大地主で、淺草寺の信徒總代でもある。が、いつも、大富豪のやうな風

姿はせず、兩袖に、がちやく〜小錢を入れて、淺草觀世音に參詣の道すがら、乞食に施して行くのが道樂である。

この人が當選した。ところが、在來、市會議員にでも當選しやうものなら、酒樽の鏡を抜いて大いに祝ふのが慣例だ。

にも係らず、松崎老は東京に居なかつた。いや逃げてしまつて居た。

市會議員になど、ちつとも成りたくないのである。それで、開票の前から伊豆の温泉に逃げ出して居たのだ。

そして、當選したと聞くと、

「そいつは迷惑千萬だ、わしは、市會議員さまとか何とか云ふ、さう云ふ柄ぢやねえ、たゞの爺に過ぎぬ、困つたことだ」

と閉口した。これが選舉肅正も不必要な本當の理想選舉、江戸つ子が、あゝ云ふ清廉潔白な人を出さねば市會が淨化せぬとしてやつた仕事だつた。

その松崎の孫太郎爺さんの云草がいゝ。

「わしが金持になつたのに、何の變哲もないんだ、たゞ、あの維新後、草茫々で皆が困り切つた土地を一坪五厘づゝで買つて置いたゞけだ、その土地を可愛がつたゞけだ、捨てられる土地が可愛だつたから」

その五厘で買つた土地が土一升金一升でも、まだ足りぬ高價な淺草の目貫の場所となつてしまつたのだ。

好運な人もある——と云ふ前に、松崎孫太郎さんにうつつた、當時の土地かあいさの純情と、それを面倒見て來たと云ふ、人が捨てる時代に——その無駄のない質實な觀念に、先づ頭を下げずばなるまい。

かう云ふ實例

まだある。岐阜一の多額納税者に渡邊長吉と云ふ人があつた。今の渡邊長吉氏の先代だ。淺草の花柳界、象潟町邊りに、此の渡邊長吉氏の土地は、どつさりとある。そして、渡邊長

吉氏の財産は、殆んど全部が此の土地であると云つてゐる。しかし、初めから大地主ではなかつたのだ。

此の渡邊長吉氏、織長と云つて最初は織物問屋であつた。お婆さんが偉くて、相當金も溜つた頃に、渡邊氏は上京した。

處で、此の上京した時に、安いから買へ、安いから買へ、と淺草の土地を無暗と買はされたものだつた。そして、賣つた方では、

「田舎ものに、うまく背負はしてやつた」

と、手をたゞいて祝杯を舉げたものだつた。

その背負された土地が、年々、非常な勢で發展して、これ亦、淺草の盛場になつてしまつたのである。

その爲め岐阜縣筆頭の多額納税者として、貴族議員にもなるし、更に今度は愛知縣で、何の役にも立たぬやうな土地を背負された。

これ亦、愛知縣の賣主達からは、

「織長に、うまく背負してやつた」と手をたゝかれたものだ。

何ぞ圖らん、その土地が、遊廓移轉で、遊廓になつてしまつて、これ亦莫大の利益であつた。淺草の賣主も愛知縣の賣主も、今では、さぞ後悔して居ることであらう。渡邊氏は、かくて十六銀行の頭取として、毎日、呑氣に謡曲をやり乍ら長逝したのだ。

經驗を生かせ

よく、諸官省官衙が出来たりして、土地が十層倍にもなつて、農家が一躍金持ちになるとがある。

だが、さうした好運に恵まれた處のお百姓さん達の十年後の生活はどうか？

さうした事のある前途は、とにかくも自作農であり小作の三人五人使つて居た人達が、何時の間にやら逆轉して、小作人に成り下がつてしまつて居る。それが情けない哉、殆んどである。

先づ金が入る。洋服を作る。そんな程度は、まだいゝ、農よりも商賣の方が有利だとばかりに、都會へ出て、慣れない商賣を始める、漸次貸倒れとなつて、一文なしになるのが十中八九である。

そんな大金が入つた時に、直ちに他の土地を購入して、相變らず農を勵んで居たならば、どんなにその金が基礎となり、富や幸福を増進するか知れないのである。

農事にある人は商業がいゝと思ふ、商業のものは不景氣だと、農家は、ともかくも食ふものがあるからいゝと云ふ。誰れでも、人のやつて居ることが、何となく、いゝやうに、うまいこととやうに考へたがるものである。

が、人生の陷穽は此處に存在して居る。判らないことに、徒らに美望して手を出すこそ、まことに盲蛇に怖ぢず——である。危険此上なしである。

そうした、つまらないことで勞力と幸福とを取り逃してしまふ人の、現在、今日でも相當に數の多いのは残念である。

人生に、經驗が無駄になることは絶対にないのである。

自分の今迄永年歩いて来た道、この経験を主として、その経験を生かして使ふやう如何なる場合でも心掛けることが、つまりは無駄のない處世法である。

人生僅か五十年と云ふ。さう云ふ短い生涯の中では、一日の體驗たつて、無駄にしてはならない道理である。

一を聞いて十を知る、と迄行かなくとも、少くとも一を聞いて二を知る爲めには推察力と、經驗とが必要である。經驗のあることが、何事でも、すぐに領かれるのである。

一二種のやくざ

米國の大富豪カーネギーは、富豪となるの秘訣として、次のやうに云つて居る。

富豪と爲る秘訣は、諸君が日々商賣して生計を得る道の延長にしか過ぎない、即ち、それは簡單明白な、次の二つの事に盡きてゐる。曰く「勤勉」と「節儉」である。之を換言すれば「時間」と「金錢」とを消費しないで、最もよく之を利用する事である。寔に入るのは易い。

たゞ、これを怠らず實行する事の難しいのが、此の致富の道だ。

そして、その金錢に就いては、カーネギーは、なほ、かう云つてゐる。

金錢は吝嗇家の思ふほど貴いものではないが、持てぬものの悔るほど無益のものではない。それが貴いのは正しく得ることが難いからだ、が、もつと難しいのは正しく費ふことである。不正の消費は馬鹿や白痴でもできる。

成程、カーネギーは、いゝことを云つてゐる。しかし、此の富豪の秘訣としての二つの中の「節儉」に就いて、フォードは、

「狐の毛皮が、夏は不要だと云つて剥いてしまつたなら、冬になつてたちまち凍死しなければならぬ。我々の經濟も同様である。現在不要な物でも、將來缺くべからざる物もある。即ち眞の經濟は、豫算の不注意な節減を云ふのでなくて、寧ろ必要な費用の増加の方針を指すのである。能率の無い所に決して經濟のある筈がない」と云つて居る。

更に、フォードは實に立派なことを云つてゐる。

それは、

「無駄には二種類ある——一つは物資を濫用する道樂者がする事であり、他は物資を使はずに朽ちさせて了ふ不精者のする事である。兩者とも無駄をすることに於ては同じである。吝嗇漢は、道樂者と同じやくざ者である。双方共、その悪癖を矯正するには、まず、正しく「使ふ」ことを知らなければならぬ」と斷言して居る。

吝嗇漢は、道樂者と同じやうに、やくざであると道破した處に、實にフォードの偉さがある。これは、やがて佛源禪師の言、

「君子は財を惜む、之を用ふるに道あればなり」

の意に通ずる。フォードの言に比較すると、スマイルスが、

「節約は貧富を論ぜず、人たる者の必ず勤めざるべからざるものにして、苟も節儉を勤めざるときは、慈善を行ひ、博愛を施さんとするも得べからず、夫の得る所の金錢を消費をする輩を見よ、嘗に他人を救助するを得ざるのみならず、兒女の教養を怠り、良心を喪ひ、その身も終

に一生を全うするを得ざるに至る」

と云つて居ると格段の相違がある。矢つ張り、フォードの方が金に就いては、よりよく知つて居たと云ふべきだ。

幸福を驅逐する

それを實證するに、かう云ふ話がある。

子供の時に、非常に裕福に育つて、壯年になつて貧乏の辛らさを味ひ盡した人があつた。

此の人は金のない淋しさを、餘り痛切に知つたものだから、一にも金を溜めなければ、二にも金を溜めなければと焦つた。そして、多勢の子供があつたが、其の大きい方の子供に、小さい方の子供の養育を任せて、(素より男の子)その女房と共に、夜を日につけて働いたのである。そして極端な節儉をした此の人の心では、金さへ出来れば幸福が來ると信じて居たのだ。處が、その人の子供は、日に一錢の小使も貰はず、朝は早くから起きて、七つ八つの小さい

手で味噌汁を煮る、雑布をかける。そして小學校へ上つた子供は、乳飲兒のおしめの洗濯もする。學校の復習、宿題、そんなものは、やるだけの時間すら與へられないと云ふ始末、時間より早く乳飲兒の乳を母に請求に行かうものなら、

「お守りの仕方が悪いのだ、もつと泣かせぬやうに遠くへ行つてこい」

と云ふ譯で追ひやられるのだ。終ひには月を仰いで、負んだ子と共に子守する兒が泣き出すと云ふ有様だつた。

そして、長男は大喜びで奉公に出て行つた。この長男は、學校がよく出来たからと云ふので、學校の先生が師範學校にでも入れたらどうか、と勤めに來たのだが、

「いえ、世の中は錢儲けです、錢を儲ける道を早く教へなければなりません、商店へ奉公にやります」

仕事の傍、その人は、頑として應じないのであつた。

次男の方は、これは又、技群の成績で、もし中學へ入れられなければ學校の方で、入れてもよいから中學へ入れるやうに、と學校の先生が矢張勤めに來たのであつた。

これは秀才を惜しんで一再ならずであつたのと、次男も亦學問好きで、どうしても、どんなに辛い働きにも堪へるからと云つて中學へやつてくれと強請した。

双方から、迫られたので、その人は次男だけは、とにかく中學へ入れることにした。それには、今、此の次男が何處かへ出て行つてしまつては、子供の炊事係と、乳飲兒のお守がなくなる、と云ふのも一つの原因だつた。

ところが、次男は中學へ行つても成績よく一年を修了した。と、その人は、今度は學資が惜しくなつてしまつた。

「なあに、子供は金儲けさへ覺へさせればよい」

との理由の下に、泣いて絶る子の氣持など、ちつとも察せず、さつさと、次男を中學から下ろして、銀行の給仕に投り出してしまつたのである。

銀行が、その次男の性格に合ふとか合はぬかは問題でなく、たゞ其の人の頭には、金を扱ふ處ならば、金に對する個人的の縁も深からうと思つたのであつた。銀行員が他の營利會社其他より收入の妙いものであることは今日では既に常識となりつゝあるのだが、其の人は、そんな

點など考へなかつた。金に苦しんだ結果、金への魅力が一切を盲目にさせてしまつて居た。

三男も、子守と炊事とに終始し、これは堪へられなく、て十五の春、脱走して小僧奉公に出
てしまつた。そして、その三男は、

「小僧奉公は辛い、他人の御飯には針があると母親から教へられて来たが、夜もゆつくり寝
せてくれるし、仕事を餘計すれば、ほめてもくれるし、月にきまつて小使錢も貰へる、小僧奉
公と云ふのは、實に樂な、有難いものである」

と、次男へ報じて来たことに依つて、如何に其の人が子供を虐使したかと判る。

四男は、幼時に軽い腦膜炎をやつた、で、

「お前は馬鹿だから他人様の家へは行けない」

と三男の轍を踏むことを恐れての、暗示を毎日與へられて、家の仕事に夜晝なしに手傳はさ
れたのである。

かくして、五男六男も同じ形式で働かせられた。

爲めに、その人は年毎に蓄財をして行つた。が、溜まれば益々汚くなること吐月峰の如しと

云はれる、かう云ふ人の金である。出すことは舌を出すのも嫌いとある。

そして相當な金が溜つた時に、長男は、いつも郷里へ金を送らぬと父親の機嫌が悪いので、
店の集金迄も繰り廻して送つたことが暴露して、元來商人に適せぬ性質であつたから忽ち、お
拂ひ箱になる。次男は志望の道を悉く斷たれて、憂鬱の結果神經衰弱となり、銀行を退職しな
ければならなくなる。三男四男も年頃となつて、一文もくれぬ父の手前、やむなく自宅の金を
誤魔化して使ふことを覚えると云ふことに立ち到つた。

そして、その人は病臥した。が、病臥しても、子供の一切を犠牲にした上に、自分も働く上
に働いた金だ、枕許から離さない。すると、その人の女房も、その人の感化を蒙つたものであ
るから、

「今、あなたに死なれて、私はどうなります、金は全部私に渡してくれねば老後が堪らぬ」
と云つて、大部分を取り上げてしまつた。

その人は、残された僅かの金から、食ひたいものも錢勘定して、食はず、病院へも入院する
ことは費用がかゝると云つて拒絶し、瀕死の病人で居乍ら、醫者に注射料を半額に負ける、と

交渉する等して、とうとう、あの世へ旅立ってしまった。

さて、その後だ、多勢の子供は誰一人として獨立して行けるものはなかつた。そして、母に迫つた。

「金は、みんなが働いた共同の金で父の金ではなかつたのだ、さあ、これからみんな家を持たねばならぬ、分配してくれ」

すると、母は、

「何と云ふ、これは亡夫が、私が老後に金がないのを心配して、金さへあれば誰れでも面倒を見てくれるから、決して子供にだつて一文もやる必要もないつて遺言だつたから」

と逃げ廻つた。

そして、中には本心から母を扶養しやう淋しからうから孝養を盡さうとしたものもあつた。

けれども、さう云ふ子供は自然、母の傍へ寄つてきて、何かと世話をやくので、

「あいつは油斷がならん、親切ごかしで金を狙つて居る！」

と母も考へたし、その兄弟達も、

「油斷をしちやいかんぜ」

と警戒させたり、互ひに牽制したりした。

爲めに、誤解されるのを嫌つた本當の孝心ある子は去つてしまひ、母は、金を奪られやせぬかと云ふ懸念から、かわいゝ自分の兒と共に生活するのを好まず、返つて危険千萬な老人の一人暮し、他人の中の一人暮しをし乍ら、年々減じて行く小金の淋しさに、

「あゝあゝ、わし程因果なものはない」

と嘆いて居る。

これは實話である。フォードが云つたやうに、此の蓄財家は濫費家以上の道樂者、やくざと見て差支ない。

板垣伯の云ひ草

これはフランスにある俚諺、

「貨幣は良き僕婢になつたり、悪い主人になつたりする」

とあるやうに、この人は金銭を良き僕婢として、佛源禪師の云ふやうに「用ふ道があるから尊い」と云ふことを知らず、生涯貨幣を悪い主人として終つたのみならず、その悪い主人の力で、伸び行く子供の芽を摘み、うまく教育したら、どんなに人材になつたり、富豪になるかも知れぬ人間を、廢人同様の無駄ものにさせてしまひ、母から母性愛を奪ひ、子から孝心を除かせ明朗を憂鬱に塗りかへさせ、おまけに、その一家の生命すら削らせてしまつたのである。

「小金を主人公として仕へるものは、凡ての幸福は抹殺せられる」

と、私は此の例から云ひたいのである。それは經濟の尊さ、流動を知らず、向上を途絶して、頼りにならない小金を、頼りとなる人間相互、肉親相互の親愛をも拒否して、頼りたがるからである。

こんな大きな無駄はない。

板垣退助伯の常に示した教訓に「柳川のうなぎ」の話がある。

柳川のうなぎを海を越へて、江戸や大阪へ送るに、うなぎの桶に、もし水を一杯入れて置く

と、うなぎの半数は大阪や江戸へ到着する前に、半分は死んで居る。處が、もし、うなぎの桶に、うなぎと水を、ひた／＼にして置けば、殆んど全部が生きて居る。それで板垣伯は云つた。

「俺が老來益々元氣なのは水がひた／＼だからだ、つまり貧乏のお蔭さ」

この話は、誠にいゝ話である。

なまなかの水、なまなかの小金があればこそ、うなぎも半分死ぬし、前述の話のやうに、その一家の幸福も殆んど全滅してしまふのである。

こんな大きな無駄はない。かう云ふ無駄をして居ては此の世に何の生甲斐もないのだ。

ルソーの警告

法句經に、

寝ねざれば夜長く、疲勞すれば道長く、愚なれば生死長し、

と云ふ句がある。

又、フランクリンの言葉に、

汝生涯を愛するか、されば汝の時間を愛せよ、汝の生涯は汝の時間より成るものなり、と云ふのがある。或は、光陰矢の如し、たとか、タイム、イズ、マネーだとか、時の尊さを訓戒する言葉は實に多い。しかるに人間は、この時の使ひ方に、非常な無駄をし續けて居る。

マクドナルドは、

駆足で時間を縮めようとする人は道を失つて時間を損する。羊の群をいちいち早く小屋に入れてしまはうと慌てる羊飼は、結局その夜見失つた羊を探し求めて、山上に夜を明すことになるものだ。時の節約は、急ぐことでなくて、確實にやることだ。

と云つて居るが、全く至言である。「ごまのまひ倒れ」と云ふ言葉がある、非常に時間を尊重して、朝から晩迄駆け廻つて働いて居た人が、さて棺を覆つて後、

「一體あんなに忙しがつて何をやつてたのだらう」

などと、阿然とさせられるものがある。これなどは、實に時間を尊重したのではなくして甚だしく時間を徒費したものだと言つていい。

これなども、世の多くの惛口な人が、ともすると陥り易い金の問題と同じである。

つまり、金を悪い主人にしてしまふのと同時に、時間が尊いから云つて、時間尊重の觀念に囚はれ過ぎて、時間を悪い主人にしてしまつたのである。

眞に分秒を愛すると云ふことは、その分秒を最も後悔せざる自分の主觀的の意味に於て使ふことであつて、それでこそ初めて時の無駄のない使ひ方と云ひ得るのである。

ルソーは、こゝに警告を發して居る。

吾々は時間の價值を知つてゐるから、それを空費したくないと諸君は云ふ。然し諸君は、時間を悪用するのは、全く何もしないよりも以上の、大きな時間の空費であるといふことを知らないのだ。

と。全く名言である。

労働者が、雨の日は一日寝て居る。もし、その寝て居る時間が、空費されて居るのだなど、考へるものは愚の骨頂である。

もし、その労働者が、雨の日こそは時間があるから、と云ふので起きて居て、悪い遊びに耽

るのは勿論話にならないが、他の事に従つたとしても、一日を寝た労働者の翌日の働きの能率と、一日を寝なかつた労働者の翌日の働きの能率とは格段の相違を來して居る。

能率をあげる働き——と云ふのが、その労働者の生命であるならば、雨の日に、寝ることこそ、最も時間を使用したもので空費したのではない。

この處が、間違ひ易い。此處に時を無駄にすることは即ち、生命を削りとることである。戒心すべきである。

大西郷の「機會の説」

更に時を無駄にしないと云ふことは、チャンスを必らず掴め、と云ふことである。

シエークスピアは云つて居る「人生の生涯には潮流がある。好潮に乗れば幸運を得、時機を逸すれば、人生の航海は我を淺瀬に、或は不幸に導かん、好潮に乗ぜよ、然らざれば時機を逸す、非常なる機會を待つを要せず、機會なしとは薄志弱行の徒の口實に過ぎず」と。太平記

にも「進むべきを知つて進むは時を失はざらんが爲めなり」と書いてある。

が、そのチャンス、その進むべき時が難かしいと云ふ人がある。それには、ホレースの云つた。

「今日を捕へよ、他日ありと信ずる勿れ」

を信すべきある。更に、大西卿は、それに就て、

「世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖の仕當てたるものをいふ。眞の機會は盡して行ひ、勢を窺にして動くと云ふにあり、平日國家天下を憂ふる誠厚からずして、只時はすみに乗じて成し得たる事業は決して永續せぬものだ」

と教へて居る。グラッドストーンも、

「現代の社會と人生とは機會に充ち満ちて居る。自己が空疎ではない限り、そこで何も發見されない、と云ふ筈はない。然も人はよく人生に絶望するといふ。絶望とは何であるか？ それは彼の身邊にあまりに爲すべき事が多すぎて、どれから手をつけてよいやら解らないで、義務に責められる事である。それを脱するには、まず手近の一つから果すがよ」

かう注意を與へて居るし、孫子の兵法にも、
 「兵は拙速さつそくを聞く、未だ巧の久しきを略りやくさざるなり」と
 と斷言して居るのだ。
 チャンスは、それを遂行する意力の如何にある——と私は敢て云ふ。

無駄のない生き方

處で、人をも物をも金をも時をも、最も無駄のないやうに使ふには、これは自己を空くわうして、
 國家に、社會に、人類に、友人同胞に、と常に考へる處に焦點があると思ふ。自己を中心にし
 て、すべての物事を運ぶ時には、必らず無駄を生ずるものである。
 人の無駄のない使ひ方は、その人を生かして使ふこと以外にはない。折角せつかくの人材じんざいを自己の小
 さい利慾りよくの爲めに鎖くわでつないで置くことは結局自分にとつて大きな無駄となつて返つて来る。
 物の無駄のない使ひ方は、不必要なものを自分の手許に、たとひ安いとて、買入れたり、藏くら

ひ込んだりすることが一番いけない。どんなものであつても、それなくては役立たぬ必須ひつとの
 場合がある。物も亦天下のものである。物そのものを役立せると云ふことを第一に念としたな
 らば自然に無駄は排除はらいぞされるのである。

金に到つては、金を死藏しざうする人は、遂に金を悪い主人とすることである。金は國家をも社會
 をも人をも、己れをも利する處に、どし／＼使ふべきである。正しく使ふ、自己的にでなく正
 しく使ふことが、やがて其の金が生きて働くことになる。

時に到つては、如何に努力どりふしたとて人生の壽命じゆんは僅かなものである。大西郷の云ふ如くに、
 平日國家天下を憂ふる誠厚まことこうくして寸秒すんびょうも惜しみ、隣人、知友、同胞どうぼうの爲めに盡せるだけ盡すこ
 とが即ち最も無駄のない使ひ方である。

かくして考へ到ることは誠に天道てんどうは是であることである。天の命する處に従ひ、更に悔なく
 生きることこそ、およそ「人」「物」「金」「時」の無駄のない使ひ方で、望まずとも幸福は向ふ
 から歩いて来るものであるのだ。

昭和十一年四月五日印刷納本
昭和十一年四月十日發行

三十一

版權所有
不許複製

人物金時

無駄のない使ひ方
定價拾錢 送料貳錢

著者 松波治郎

發行所 東京市杉並區高圓寺七ノ九〇一
楠 駿 二

印刷所 東京市小石川區戸崎町九六番地
中橋印刷所

發行所 さんもん書房

東京市麩町區有樂町二丁目二番地(石川ビル)
電話銀座 四七一〇・四八二四番

取次店一 東京市麩町區有樂町二ノ二
森田書房一 大阪市北區堂島上三丁目二十五
新正堂書店

特約店 東京鐵道局認養會
(鐵道各驛一埠多手販賣)

終

多摩川國の中心に新聞社

會期三月二十二日より五月三十一日まで

春・行樂の別天地
燦爛・花の多摩川園

約五百坪のついで
名城と合戦のメッセ
三十分位

倫理・雪、花、夜

東横目蒲電